

町田市のスポーツ政策：社会体育実技指導員登録制度について

著者	松田 一如, 布施 善克, 中島 弘毅, 鄭 泰應, 斎藤 慎太郎, 五明 公男
雑誌名	日本歯科大学紀要. 一般教育系
巻	28
ページ	161-179
発行年	1999-03-20
URL	http://doi.org/10.14983/00000508



町田市のスポーツ政策

—社会体育実技指導員登録制度について—

Sport policy at Machida-Shi

—Study on the community sport leader—

歯学部	松	田	一	如
東京医科歯科大学	布	施	善	克
聖徳大学短期大学部	中	島	弘	毅
日本体育大学	鄭		泰	應
	齋	藤	慎	太郎
法政大学	五	明	公	男

Kazuyuki MATSUDA

The Nippon Dental University
Fujimi, Chiyoda-Ku, Tokyo102, Japan

Yoshikatsu FUSE

Tokyo Medical and Dental University
Kohnodai, Ichikawa-shi, Chiba272, Japan

Kouki NAKAJIMA

Seitoku University Junior College Section
Sagamidai531, Matsudo-Shi, Chiba271, Japan

Tae-Eung Jung and Shintarou SAITOH
Nippon Sport Science University
Fukasawa, Setagaya-Ku, Tokyo158, Japan

Kimio GOMYO

HOSEI University
Fujimi, Chiyoda-Ku, Tokyo102, Japan

(1997年11月28日 受理)

1. はじめに

私たちは、1997年に町田市のスポーツ行政に関する実態調査を行った。

町田市は、東京都の南端に位置し、市のほぼ全域が多摩丘陵に含まれ、ゆるやかな起伏に富んだ自然環境に恵まれたところである。また近年は商業地としても発展し、都心から30 km圏内にあり新宿へ35分、新横浜へ20分、八王子へも30分と地の利にも恵まれている。

町田市は、市制発足(1958年)以来、わが国の高度経済成長と軌を一にして宅地開発が進行し、急激な人口増加(1958年の人口60,957人～1998年の人口364,267人と約6倍に膨脹)と都市化に見舞われ“東京のベッドタウン”として発展してきた。このような状況のなかで1970年以降『福祉の町・住みよい町づくり』を標榜し様々な行政施策を展開している。

スポーツ振興もその中の重要施策の一つであり“市民皆スポーツ”を目標にしてきたが財政的には、住宅(主に団地)、学校、道路建設等、市民の生活基盤整備に追われ、スポーツ関連予算の確保が難しい状況であった。加えて、町田市では人口増加に比例した豊かな税収につながる産業や企業が少なく、財政の逼迫した状況下では尚更であった。

市は窮地のなかで市民のスポーツに関する要望を満たすため様々な施策を行ってきた。(1)スポーツ参加をしやすくする行事の多様化、(2)指導者不足を補う社会体育実技指導員登録制度(以下、実技指導員登録制度)、(3)グループづくりを促進させる登録団体制度、(4)施設の不足を補うスポーツ広場や学校解放等である。

本研究では、市の様々なスポーツ施策のなかから実技指導員登録制度を取り上げた。

この実技指導員登録制度とは、1971年に発足した制度で市民のスポーツ活動を積極的に支援・援助をするもので、市民の生涯スポーツの振興普及を目的としている。これは市の資格基準を充している者が自ら<実技指導員>として市に得意指導種目を二種目程度登録しておき(人材バンク)、指導者のいないグループから市へ指導者派遣要請があったときに、市が適切な指導者を選択し派遣する制度で、1団体に対し指導回数は10回を限度として、謝礼を市が負担するというものである。

▼ 登録資格=満20歳以上の者で、次に掲げる基準の一つに該当していること。1) 体育団体が認定する公認指導者資格を有する者。2) 大学において体育関係の学部、学科等を卒業した者。3) スポーツ選手経験が5年以上の者。4) スポーツ指導の経験が5年以上の者。5) その他、特に教育委員会が認めた者。 ▼ 登録有効期間=2年間。 ▼ 登録種目数=28種目 ▼ 指導時間と謝礼=原則1回2時間-4,000円

私たちは、1976年にも今回と同様、実技指導員登録制度について実態調査を実施して

いる。以来、20年余りの時間経過と社会変化のなかで、市のスポーツ行政施策の一つである実技指導員登録制度がどのような役割を果たしてきたのか、どのような変容をたどっているのか、変容の要因にはどのようなことが考えられるか、また応募の動機や活動上の問題点を探り、前回と今回の調査結果を比較、分析し、今後の実技指導員やその制度の在り方、更に市のスポーツ行政の方向性などを考察した。

2. 研究方法

1996年度に登録された町田市実技指導員182名を対象にアンケート調査を実施し、その結果をもとに1976年の調査結果と比較検討し、分析を試みた。併せて文献調査も行なった。アンケート調査の内容は前回と同一のものを使用し、質問紙郵送法によった。調査時期等においては以下の通りである。

調査時期：1997年4月5日～4月20日 回収数(率)：133通(73.1%)

前回の調査について

調査対象：1975年度に登録された町田市実技指導員101名

調査時期：1976年3月9日～3月31日 回収数(率)：63通(62.4%)

調査項目：1) 基礎項目 2) 属性 3) スポーツ活動などの現状 4) 運動歴
5) 登録の動機、家族の理解度 6) 実技指導員としての活動状況
7) スポーツ観、スポーツ団体などの役職 8) 謝金
9) 活動上の問題点 10) 実技指導員の今後の在り方等32項目

3. 結果と考察

(1) 年度別登録者数

実技指導員制度発足時('71年)には、市の体育協会より推薦を受けた50名が登録され、活動が始まったが、この制度本来のすがたである自主登録は翌年から機能し、登録有効期間も'76年からは1年間であったものが2年間に変更された。制度発足から現在までの('97年)登録者数の推移は、不明な年度や一時期減少が見られるものの、全体としては増加傾向にあるといえる。'88年度には登録人数の減少が見られるが、これは実技指導員の登録基準が変更されたことによるものである。かつては、『20歳～45歳の市内在住在勤者で一種目以上の専門種目および補助種目をもち実技指導の経験を有する者』であったがその後、種々問題点が出現し、資格基準の整備が必要となり改正された。加えてスポーツ課は市民へサービスの一つとしてテニス教室を開講していたが、愛好者が急増し市の施設不足が生じたため、一般愛好者の場を確保する必要性から、一時的に市が主催するテニス教

室を中止した。その結果、多くのテニス実技指導員が登録を取り止めてしまい、これらも減少に繋がっている。

男女別では、'71年～'75年までは圧倒的に男性の登録者が多く、資料表-1から、'84年以降逆転し、女性の登録者が急激に増加した。なかでも'86年～'91年には女性が7割～8割を占めることもあった。これ等の変化は経済状況の影響が考えられる。オイルショックや円高不況が誘因となり産業構造の変革が余儀無くされ、それによって人々の意識の改革や社会の変容が生じたためである。取分け女性のスポーツ活動に対する参加意識や社会進出・社会参加が大きく加速する切っ掛けになった結果ではないかと考えられる。

(2) 回収数の比較

'76年の回収数は63/101（回収率62.4%）で'97年の回収数は133/182（回収率73.1%）と前回の調査時よりも回収率で10%以上上回った。これはスポーツ行政に対する実技指導員の関心の高まりを窺わせるものであろう。前回は回収数の約70%が男子で30歳代が最も多かったが、今回の調査では62%近くを女性が占め50歳代以上が最も多かった。表-2参照。前回と今回の比較では女性指導員の増加と高齢化が注目された。他方20歳・30歳代の登録が少ないことが、将来の指導者確保のうえで障害とならないか危惧される。

表-1 年度別登録者数 単位：人

年度	男	女	計
'71年 (第1回)	46	4	50
'72年 (2)	76	7	83
'73年 (3)	75	18	93
'74年 (4)	63	35	98
'75年 (5)	78	28	106
'76年 '77年	不	明	不明
'78年 '79年	〃	〃	〃
'80年 '81年	〃	〃	〃
'82年 '83年	〃	〃	〃
'84年 '85年	50	64	114
'86年 '87年	39	99	138
'88年 '89年	18	74	92
'90年 '91年	30	75	105
'92年 '93年	49	84	133
'94年 '95年	78	101	179
'96年 '97年	68	114	182

表-2 回収数

	1976			1997			
	男	女	計	男	女	計	
学生	5	1	6	10歳代	1	0	1
20歳代	9	1	13 (15.9%)	20歳代	5	7	12
30歳代	18	12	30 (47.6%)	30歳代	9	5	14
40歳代	11	3	14 (22.2%)	40歳代	13	26	39 (29.3%)
50歳代～	1	2	3	50歳代～	23	44	67 (50.4%)
計	44	19	63	計	51	82	133
%	69.8	30.2		%	38.3	61.7	

表-3 職業別登録者数 単位：人

1975年度					1997年度				
	男	女	計	%		男	女	計	%
学 生	12	1	13	12.3	学 生	0	0	0	0.0
会 社 員	38	0	38	35.8	会 社 員	25	3	28	15.4
自 営	4	0	4	3.8	自 営	8	4	12	6.6
教 員	8	1	9	8.5	教 員	8	2	10	5.5
公 務 員	11	2	13	12.3	公 務 員	8	0	8	4.4
サービス業	1	0	1	0.9	サービス業	0	0	0	0.0
そ の 他	2	2	4	3.7	そ の 他	9	5	14	7.7
な し	2	22	24	22.6	な し	5	105	110	60.4
計	78	28	106	100.0	計	63	119	182	100.0
%	73.6	26.4			%	34.6	65.4		

(3) 職業別登録者数の比較

登録者の職業について前回と今回の調査結果を比較してみると、今回では前回に比べ自営、その他が増加したものの、会社員、教員、公務員の登録がかなり減少し、学生の登録はなくなった。一方今回では職業なし（専業主婦含む）が60.4%と突出していた。しかもそのうちの95.5%が女性であった。表-3参照。バブル経済の崩壊後、長引く不況が学生、サラリーマン層にも時間的、経済的に厳しい状況をもたらしているように思われる。

(4) 種目別登録者数

種目別登録者数においては、水泳35、軽体操25、バドミントン23が特に多く、これらの種目について卓球、スキー、バレーボール、レクリエーションが制度発足当初より堅実に登録がされていた。他の種目についてはその時々流行や状況によって登録者の増減が左右された。一般的に種目の多様化が進むなかで登録される種目は、それほど増加していない。表-4参照

(5) 年度別指導状況

'71~'95年までの実技指導員の実働回数は、表-5のとおりである。

指導要請の多い種目は軽体操、バドミントン、卓球、水泳であった。因に'95年度を取り上げてみると、◎軽体操…実働回数-147、指導員延べ人数-232、参加者数-10.431。

◎バドミントン…実働回数-118、指導員延べ人数-284、参加者数-4.685。

◎卓球…実働回数-107、指導員延べ人数-274、参加者数-5.327。

◎水泳…実働回数-71、指導員延べ人数-405、参加者数-3.602。であった。

表-4 種目別指導員登録者数

種目 \ 年												
	'71	'72	'73	'74	'75	'84	'86	'88	'90	'92	'94	'96
	'71	'72	'73	'74	'75	'85	'87	'89	'91	'93	'95	'97
1 バドミントン	4	5	7	14	11	6	18	11	12	17	23	23
2 軽体操	0	4	5	8	11	15	20	16	19	18	26	25
3 スキー	0	5	3	2	4	9	6	1	6	10	12	9
4 卓球	5	10	11	9	8	8	12	9	13	15	14	13
5 硬式テニス	0	0	0	0	0	27	32	12	3	2	11	12
6 軟式テニス	5	8	5	4	7	4	2	1	0	0	0	0
7 水泳	6	7	8	8	5	16	19	25	24	28	32	35
8 バレーボール	4	9	8	10	1	6	5	4	2	5	5	4
9 バスケットボール	0	0	0	0	1	2	1	0	0	0	0	0
10 ソフトボール	0	0	0	0	0	6	5	4	2	2	2	2
11 柔道	0	0	0	1	2	0	0	0	8	22	12	11
12 レクリエーション	4	8	16	13	10	11	6	6	7	0	4	4
13 綱引き	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0
14 なぎなた	0	0	0	0	0	1	9	0	0	0	0	0
15 弓道	0	0	0	0	0	0	0	0	6	11	12	11
16 陸上競技	0	1	1	0	1	0	0	0	0	3	4	3
17 トランポリン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	5	5
18 サッカー	7	7	4	7	4	0	0	0	0	1	1	2
19 太極拳	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	4
20 ヨガ, 気功	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	3
21 ダンス (社交, 日舞含む)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	2
22 アーチェリー	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	11
23 器械体操	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
24 剣道	4	8	7	8	4	0	0	0	0	0	0	0
25 空手	6	6	6	5	0	0	0	0	0	0	0	0
26 軟式野球	3	2	4	3	5	0	0	0	0	0	0	0
27 射撃	2	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
28 サイクリング	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
29 スケート	0	0	6	4	2	0	0	0	0	0	0	0
30 ラグビー	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
31 その他	0	0	0	0	0	0	0	3	0	2	1	0
計 (人)	50	83	93	98	97	114	138	92	105	133	179	182

表-5 年度別指導状況

年\項目	実技指導員数	サービスの件数	実技指導員の延べ人数	一人平均年間指導回数	参加者数
'71	50人	件	人	回	人
'72	83	157	726	8.7	
'73	98	313	424	4.3	
'74	97	394	521	5.4	
'75	106	639	878	8.3	
'85	114	19	66	0.58	1.980
'88	92	293	605	6.6	12.794
'89	92	342	1046	11.4	14.362
'90	105	318	1146	12.5	15.066
'91	105	620	1913	10.9	23.619
'92	133	420	1139	18.2	25.486
'93	133	465	2015	15.2	25.347
'94	179	732	2274	12.7	35.838
'95	179	703	1696	9.5	34.979

この資料からも判るように、指導員の実働回数や市民の参加者数の増加傾向は、地域生活環境の悪化、超高齢化社会の到来や健康不安の増大ともますます高まるのではないかと予想される。

アンケート調査の結果と考察

(1) 基本的事項について

① 指導員の市内居住年数

町田市在住者が'76年の調査では95.2%であったが、今回の調査では88.7%に減少していた。また前回では10年以上の居住者が32.2%であったが、今回では67.7%と倍増していた。また40歳以上では10年以上居住しているものが76.7%を占めていた。表-6参照。

② 指導員の最終学歴

'76年、'97年、各々大学在学中を含めた大学卒は57.1%と55.7%であり、あまり変化は見られなかったが、'97年ではその他（専門・各種学校卒）が11.3%と新たに出現し注目された。表-7参照。

③ 自分がスポーツをする目的

表一6 年代別市内居住年数'76年と'97年の比較 単位：人

年代	\ 居住年数	生まれ	3年	3年以上	6年以上	10年以上	不明	計
		育った	未満	6年未満	10年未満		非該当	
19歳以下	'76	1	0	0	2	2	0	5
	'97	0	0	0	0	1	0	1
20歳代	'76	2	2	2	1	3	1	11
	'97	4	2	1	0	5	1	13
30歳代	'76	3	2	3	12	8	2	30
	'97	3	1	2	0	5	5	16
40歳以上	'76	0	2	2	7	6	0	17
	'97	2	0	4	9	79	9	103
計 (%)	'76	6 (9.5)	6 (9.5)	7 (11.1)	22 (34.9)	19 (32.2)	3 (4.8)	63 (100)
	'97	9 (6.8)	3 (2.3)	7 (5.3)	9 (6.8)	90 (67.7)	15 (11.3)	133 (100)

表一7 指導員の最終学歴 単位：人

		義務	新制	大学以上	大 学	その他	不 明	計
		教育	高校	短大含む	在学中			
19歳以下	'76	0	0	0	6	0	0	6
	'97	0	0	0	1	0	0	1
20～29歳	'76	0	5	5	0	0	0	10
	'97	0	0	5	2	5	1	13
30～39歳	'76	1	13	16	0	0	0	30
	'97	0	1	13	0	1	1	16
40歳以上	'76	4	4	9	0	0	0	17
	'97	1	39	53	0	9	1	103
計 (%)	'76	5 (7.9)	22 (34.9)	30 (47.6)	6 (9.5)	0	0	63 100%
	'97	1 (0.8)	40 (30.1)	71 (53.4)	3 (2.3)	15 (11.3)	3 (2.3)	133 100%

表-8 自分がスポーツをする目的 (複数回答) 単位:人

	n 数		健康の た め	心身の 鍛 練	楽しみのため 面白いから 気晴らし	試合に 勝つため	付き合い上	その他	不 明	計
	男	'76	44	26	24	21	2	0	4	0
		%	59.1	54.5	47.7					
'97		51	30	20	25	11	2	3	1	92
		%	58.8	39.2	49.0	21.6				
女	'76	19	12	6	10	1	0	2	0	31
		%	63.2	31.6	52.6					
	'97	82	66	25	59	3	1	9	0	163
		%	80.5	30.5	72.0			11.0		
計	'76	63	38	30	31	3	0	6	0	108
		%	60.3	47.6	49.2	4.8				
	'97	133	96	45	84	14	3	12	1	255
		%	72.2	33.8	63.2	10.5		9.0		

表-8 から「健康のため」が男性では前回と今回の調査にあまり差は見られなかったが、女性では17%近く増加した。

「心身の鍛練」の女性では前回、今回の差はあまりなく、男性では54.5%~39.2%に減少していた。

「楽しみ・面白み・気晴らし」では男性は大きな差はなかったが女性では52.6%~72.0%と20%以上も増加した。

実技指導員のスポーツをする目的として心身の鍛練や勝利指向が減少し健康指向や楽しみ指向が増加していた。

(2) 運動経験とクラブ所属について

- ① 現在のスポーツクラブ等の所属では、現在、なんらかのスポーツクラブ・グループに所属している人は、79.7%で前回よりも若干増加していた。表-10 参照。また、スポーツ以外のクラブ・グループへの所属は、32%の人がなんらかの文化活動に参加していた。
- ② 職場や学校、地域でのグループやクラブへの所属は全体として減少傾向にあり民間商業施設への所属(その他)が新たに目に付いた。表-9 参照。

表-9 所属クラブの場 (複数回答)

単位:人

		職 場	地域の	入って	その他	不明
		学校の	クラブ	いない		
'76	男(44)	16	30	8	0	0
	%	36.4	68.2	18.2		
	女(19)	1	11	6	0	0
	%		57.9	31.6		
	計(63)	17	41	14	0	0
	%	27.0	65.1	22.2		
'97	男(51)	11	32	7	8	29
	%	21.6	62.7			
	女(82)	4	42	20	14	56
	%		51.2	24.4		
	計(133)	15	74	27	22	85
	%	11.3	55.6	20.3	16.5	

※その他…民間商業施設

表-10 現在のスポーツクラブ所属

単位:人

		クラブに	クラブに
		入っている	入っていない
'76	男(44)	36	8
	%	81.8	18.2
	女(19)	13	6
	%	68.4	31.6
	計(63)	49	14
	%	77.8	22.2
'97	男(51)	44	7
	%	86.3	13.7
	女(82)	62	20
	%	75.6	24.4
	計(133)	106	27
	%	79.7	20.3

表-11 試合経験 (複数回答)

単位:人

		市区町村大会					都道府県大会					全 国 大 会	国 際 大 会
		小 中 学	高 校	大 学	就 職 後	な し	小 中 学	高 校	大 学	就 職 後	な し		
'76	男 44	17	12	2	7	6	7	12	4	7	14	12	2
	%	38.6	27.3				15.9	27.3		15.9			
	女 19	11	1	0	0	7	2	10	1	1		6	0
	%	57.9						52.6					
	計 63	28	13	2	7	13	9	22	5	8	14	18	2
	%	44.4	20.6			20.6	14.3	34.9					
'97	男 51	24	13	2	5	7	9	20	4	9	9	15	3
	%	47.1	25.5				17.6	39.2		17.6	17.6	29.4	
	女 82	45	8	1	5	23	22	19	5	7	29	21	3
	%	54.9				28.0	26.8	23.2			35.4	25.6	
	計133	69	21	3	10	30	31	39	9	16	38	36	6
	%	51.9	15.8			22.6	23.3	29.3	6.8	12.0	28.6	27.1	

- ③ 試合の経験では、市区町村大会の参加には小中学校で、前回、44.1%であったが、今回は51.5%に…。都道府県大会参加も小中学校で14.3%から23.3%に増加し、大会参加経験の早期化が窺える。

全国大会参加経験も約3割が持っており、国際大会参加経験も2人から6人にふえていた。表-11 参照。

(3) 指導活動に関して

- ① 登録回数5回以上（経験年数10年以上）が27.1%で最も多く女性が男性の3倍であった。4回も19.5%と経験年数の豊かな指導員が多かった。表-12
- ② 一年間の指導回数を見てみると、前回では1ヵ月に一度以上の指導をしている人が33.3%であったが、今回は42.8%と10%の増加であった。一方一度も指導に携わらなかったものも11.3%いた。表-13
- ③ 指導曜日は、前回男性の72.7%が日曜・祝日に指導をし、女性の68.4%が週日であった。今回男性では、日曜・祝日に指導していたのは23.5%でしかなかった。男性の49.0%が土曜日、31.4%が週日に移行していた。女性は前回と同様週日が最も多く次に土曜の指導もふえていた。日曜・祝日の指導は前回の調査と比較すると激減していた。これらは週休2日制の普及とともに人々の週間生活パターンが変化している顕れと見ることができる。表-14 参照
- ④ 指導時間帯では、前回、男性は日曜の午後に多く、女性は週日の午前、午後いずれも平均して多かった。今回、男性は午後から夕方にかけての指導が60.8%。女性では午後より午前の指導が多くなっている。表-15 参照
- ⑤ 謝金については、前回の男女および今回の男性は、約7割が謝金の額に対して適当と答えていたが、今回調査の女性では、適当と答えた人が56.1%で最も少なかった。同時に少なすぎると答えた人が20.7%も出現していた。表-16 参照

(4) 応募の動機、切っ掛け、指導回数等についてクロス集計の結果

- ① 応募の動機は、『運動・スポーツがすきで』が最も多く次いで『地域社会への奉仕』でこれは前回よりも10%程上回っていた。『青少年を鍛える』は20.6%から9.0%に減少していた。また『余暇を有意義に過ごすため』が6.3%から17.3%に増加していた。表-17 参照
- ② 実技指導員になった切っ掛けについては、“自分から進んでなった”は男性では45.5%から37.3%に減少し、女性では逆に36.8%から47.6%に増加した。

『人から薦められてなった』も女性では26.3%から41.5%とかなり増加していた。何れも女性の積極的な社会参加や社会進出が進んでいるように思われる。表-18 参照

表-12 指導員登録回数 単位：人

'97	1回	2回	3回	4回	5回 以上	不明
男 51	5	10	14	13	9	
%	9.8	19.6	27.5	25.5	17.6	
女 82	12	19	9	13	27	2
%	14.6	23.2	11.0	15.9	32.9	
計 133	17	29	23	26	36	
%	12.8	21.8	17.3	19.5	27.1	

表-13 年間指導回数 単位：人

	0回	1回～ 5回	6回～ 10回	11回～ 15回	16回 以上	不明	
'76	男 44	7	17	7	2	9	2
	%		38.6			20.5	
	女 19	0	4	5	5	5	
	%		21.1	16.3	26.3	26.3	
	計 63	7	21	12	7	14	2
%	11.1	33.3	19.0	11.1	22.2		
'97	男 51	1	17	10	11	9	3
	%		33.3	19.6	21.6	17.6	
	女 82	14	15	5	3	34	11
	%	17.1	18.3			41.5	
	計133	15	32	15	14	43	14
%	11.3	24.1	11.3	10.5	32.3	10.5	

表-14 指導曜日（複数回答） 単位：人

		週日	土曜	日曜 祝日	非 該当	不明
'76	男 44	3	6	32	7	1
	%			72.7	15.9	
	女 19	13	2	4	0	2
	%	68.4				
	計 63	16	8	36	7	3
%	25.4		57.1			
'97	男 51	16	25	12	1	1
	%	31.4	49.0	23.5		
	女 82	37	21	6	14	
	%	45.1	25.6			
	計133	53	46	18	15	1
%	39.8	34.6	13.5			

表-15 指導時間帯（複数回答） 単位：人

		早朝 8時前	午前 8時～12時	午後 12時～16時	夕方 16時～18時	夜間 18時以降	非 該当
'76	男 44	2	16	24	4	3	7
	%	36.4		54.5			
	女 19	0	8	8	0	4	0
	%	44.4		44.4			
	計 63	2	24	32	4	7	7
%	38.1		50.8				
'97	男 51	3	20	18	13	11	1
	%	39.2		35.3	25.5		
	女 8	0	43	26	6	0	14
	%	52.4		31.7			
	計133	3	63	44	19	11	15
%	47.4		33.1	14.3			

表-16 謝金について 単位：人

		少なすぎる	適当	多すぎる	その他 (含む不要)	不明
'76	男 44	10	31	0	3	
	%	22.7	70.5			
	女 19	2	13	2	2	
	%		68.4			
	計 63	12	44	2	5	
	%	19.0	69.8			
'97	男 51	6	35	2	6	2
	%	11.8	68.6			
	女 82	17	46	5	9	5
	%	20.7	56.1			
	計133	23	81	7	15	7
	%	17.3	60.9	5.3	11.3	5.3

表-17 応募の動機 (複数回答) 単位：人

		運動・スポーツ が好き	地域社会へ の奉仕	青少年を 鍛える	余暇を有意義 に過ごす	その他
'76	男 44	21	20	10	4	1
	%	47.7	45.5	22.7	9.1	
	女 19	10	7	3	0	3
	%	52.6	36.8	15.8		15.8
	計 63	31	27	13	4	4
	%	49.2	42.9	20.6	6.3	6.3
'97	男 51	22	27	7	10	3
	%	43.1	52.9	13.7	19.6	
	女 82	50	43	5	13	11
	%	61.0	52.4	6.1	15.9	13.4
	計133	72	70	12	23	14
	%	54.1	52.6	9.0	17.3	10.4

表-18 実技指導員になった切っ掛け (複数回答)
単位：人

		自分から すすんで	人から薦 められて	体協の 推薦で	その他
'76	男 44	20	14	10	
	%	45.5	31.8	22.7	
	女 19	7	5	5	2
	%	36.8	26.3	26.3	
	計 63	27	19	15	2
	%	42.9	30.2	23.8	
'97	男 51	19	17	13	3
	%	37.3	33.3	25.5	5.9
	女 82	39	34	8	5
	%	47.6	41.5	9.8	6.1
	計133	58	51	21	8
	%	43.6	38.3	15.8	6.0

(5) 実技指導員をやって良かったこと、困ったことについて。

実技指導員をやって良かったこと、困ったことをフリー回答で質問したところ次のような意見が多くだされた。(複数回答)

◎良かったこと

- ① 世代を超えて、友人、仲間ができた。 46
- ② 指導することにより、逆にいろいろ広く学べたこと。 41
- ③ 参加者から効果が上がって、感謝されたこと。(健康になった。技術が向上した等) 16

◎困ったこと、活動上の問題点では。

- ① 専門知識や、指導技術の不足。 30
- ② 指導者間の交流不足や情報不足、人間関係の難しさ。 17
- ③ 施設、設備の不足や不備 10

* 今回は行政側に対しての不満が前回よりも比較的少なかった。これは行政側に市民の声が、ある程度、反映されてきているためと考えられる。

◎理想とする技術指導員の今後の在り方については。

- ① より高度な専門知識や技術を身につけること。 43
そのための研修会，講習会の開催を望んでいた。
- ② スポーツの楽しさを伝えてゆくこと。 12
- ③ 市民がスポーツを楽しめる環境づくりに協力すること。 8
 - ・ 前回の調査と同様，実技指導員の質の向上をはかるべく研修会などの提案や，種目ごとのカリキュラム作成の具体的提案がなされているものが多かった。
 - また，指導技術や知識に不安を抱いている指導員が，多く存在していることがわかった。

ま と め

- ① 実技指導員は市内居住者が多く，10年以上の居住者が前回の調査と比べ倍増していた。
- ② 指導員の年代層の中心が，30歳代から50歳代に移行していた。
- ③ 男性の登録者が減少し，女性の登録者が倍増，その内の大部分は主婦であった。
- ④ 一般的には，スポーツ種目の多様化が進展していると云われているが，市民の指導種目需要は25年間で15～19種目と変化が少なかった。需要の多い種目は限られている。
- ⑤ 指導員のスポーツクラブへの所属は，8割が入っているが，地域でのクラブ所属が減少していた。
- ⑥ 指導員の大会参加経験は早期化している。
- ⑦ 指導曜日では，前回男は7割強が日曜・祝日，女は7割弱が週日に指導していたが，今回それぞれ激減し，週日や，土曜日に分散していた。
- ⑧ 応募の動機では，単に『スポーツ・運動が好きだから』だけでなく，『地域社会への奉仕』や，『余暇を有意義に過ごす』が増加し，やりがい・生きがい追求につながっている。
- ⑨ 実技指導員をやって良かったこととしては，世代を越えて友人・仲間ができたこと，また指導することにより，逆に多くの事柄が広く学べたこと。等が多かった。
- ⑩ 困ったこと，活動上の問題点では，専門知識や指導技術不足，指導者間の人間関係の難しさ。施設，設備の不足や不備が依然としてあがっていた。
- ⑪ 今後の指導員の在り方については，より高度な専門知識や技術を身につけること。そのための研修会，講習会を希望していた。
- ⑫ 実技指導員登録制度が発足してから27年が経過し，その間紆余曲折があったもの

のおおよそ登録数、サービスの件数、参加者数は増加しており、スポーツ指導者の需要は拡大している。

結 語

前回の調査から22年が経過したが、その間、科学技術の進歩は勿論、日本の社会は様々な然も、大きな変革（産業構造、所得、都市化、情報量、価値観や生活意識等）に見舞われた。当然、スポーツに関する様相も大きく変わった。スポーツ人口の増加、スポーツ科学の発達、目的意識や種目の多様化、情報量の増加、アマチュアリズムの崩壊、スポーツ産業の興隆＝大企業のスポーツ関連部門への参入等があげられる。

このような状況のもとで、今後、町田市の実技指導員制度はどのような役割を果たし、どのような方向を目指すべきか若干の考えを述べてみたい。

まず現代社会を一瞥してみると、種々、環境悪化に伴う健康や生命、生存の危機、不安を感じている人々が急増している。開発の名のもとに自然環境は無闇に破壊され、大気や水質の汚染、地球温暖化、化学物質による生態系崩壊が急速に進行し、1962年に書かれた Rachel Carson の『沈黙の春』同様、生物にとっては極めて危険な状況が現実になりつつある。

一方、社会的環境面においては、政治・経済・社会のシステムやその運用に一貫した理念や哲学、思想の欠落が、昔から一般的に広く共有された認識である。政治に例をとれば、事に当たって、場当たりの対症療法でお茶を濁し、外部の刺激や圧力には右顧左眈し、思慮のないまま、力の強いものにはただ迎合するという具合である。当に、E, H, E, Erikuson のことばを借りれば identity 喪失の国家と云わざるをえない…。

社会的にも公平性、公正性の立ち後れ、貧富格差の拡大。自由競争、実力主義と聞こえはいいが所詮、弱肉強食の世界に他ならない。超高齢化社会到来を目前にしての福祉の後退等々、方向性の定まらない社会状況の中で、人心の荒廃が進行している。（教育問題、いじめや子供の自殺、若年者層の凶悪犯罪の激増、中高年者の自殺の急増 他）まさに生命や生存、健康の維持に危機、不安感を懐かせる要因が漸増している。

昨今の異常とも思える、中高年者の健康指向ブームは、将来の不安に対するささやかな自衛行動と見ることが出来ないだろうか。

現代の日本社会には、未だ産業構造の下支えとして大量生産、大量流通、大量消費基地として大都市形成は不可欠である。それは主に、地方から都市への人口移動によって惹起される過密と過疎、家族や地域の崩壊、核家族や単独世帯の増加等の問題が新たに生じた。これらの人々に必要な新たな人間関係構築の場が求められている。

また、複雑な高度産業社会を維持するシステムとしての官僚制機構（M、ヴェーバーに代表される、社会学的、組織論的な定義としての）の中や、管理強化された企業内の労働過程では、具体的、直接的なやり甲斐や生き甲斐を得ることは難しくなっている。加えて、O・A化、機械化の進んだ職場では身体的運動欲求も充足されにくい。

このような社会状況の中で、新しい人間関係構築の場や機会が提供でき、実際の身体運動によって、やり甲斐、生き甲斐を直接体験したり、運動欲求を満足することが出来るのもスポーツのプラス効果と云える。同時にこれらのサービス提供は、実技指導員制度の大きな役割にもなっている。将来的にもこの役割傾向は、ますます増強されるものと考えられる。

1980年前後から、民間企業において、スポーツに関する様々なサービスの提供が急速に増加した。しかし、バブル経済の崩壊後、企業のリストラ対策の一番の対象が運動クラブの休止や廃部であった。記憶に新しい1993年J・リーグ発足当時、日本中が狂気染みた盛り上がりを見せたサッカー熱も、いまではサポーター離れやスポンサーの撤退が相次ぎ、存亡の岐路に立たされている。ボーリング、実業団野球、バレーボール、バスケットボール、体操競技、バドミントン、等の衰退は周知のとおりである。更に営利目的のスポーツクラブ、アスレチッククラブなど商業施設の廃業、倒産も夥しい。国でも民間企業でも、文化としてのスポーツ、身体運動を人間の生活に取って食事や睡眠同様、なくてはならないものと真に理解し得ておらず、スポーツによって権力者や企業がイメージアップを図り、利潤追求の一手段として利用するだけで、都合が悪くなれば真っ先に切り捨てられる文化水準なのである。

スポーツ流行現象は今に始まったことではなく、戦前から現在と同様に繰り返されてきた。特に日本人は、悲しいくらいに流行に脆く“新しい物好き”で“熱しやすく冷めやすい”と昔から云われているが、戦後でも爆発的、狂気のように流行し、マスコミから消えていったスポーツ現象は枚挙に暇がない。

このような文化的特徴と国民の貧富格差が増大し、二極分化する中で、地域や個人に密着したスポーツ文化を着実に守り、振興・育成してゆくことの出来るのは、未だ自治体によるスポーツ政策以外に、今のところ見当たらない。

今回の実態調査によると、'95年に実技指導員制度を利用した市民は35,000人にも上り、町田市総人口の10%に当たる。サービスの件数、参加者数の増加が示すとおり、今後も実技指導員の割合はますます高まると考えられる。実技指導員の高度な指導技術や専門知識は当然ながら、多様な参加ニーズに対応できる広い視野と深い指導理念が要求されて来よう。そのための個人の努力は勿論、行政サイドからの研修制度の確立や施設、設備の充実と同

時に指導員の身分保障の整備が早急に求められる。

最後に本研究の資料収集にあたり、町田市スポーツ課・熱田主査，法政大学バレーボール部監督・吉田氏，同バドミントン部監督・児島氏には，貴重な資料提供をいただき，大変お世話になりました。ここに深甚なる謝意を表します。

参考・引用文献

- 1) 東京都町田市，「町田市総計書」 1998年 第32号
- 2) 宮本憲一「人間の歴史を考える——環境と開発」 岩波書店 1992年
- 3) 経済企画庁編「国民生活白書」平成6年 平成9年度版
- 4) 余暇開発センター「レジャー白書'94」平成6年
- 5) 井上 俊 他編「現代社会学——環境と生態系の社会学」 岩波書店 1996年
- 6) 井上 俊 他編「現代社会学——日本文化の社会学」 岩波書店 1996年
- 7) 内嶋善兵衛 編「地球環境の危機」 岩波書店 1990年
- 8) 宇沢弘文「現代日本経済批判」 岩波書店 1987年
- 9) 橘木俊詔「日本の経済格差」 岩波書店 1999年
- 10) Karel van Wolferen「人を幸福にしない日本というシステム」 毎日新聞社 1994年
- 11) 菅原禮 監修 糸野豊 編著「スポーツ社会学講座2——現代社会とスポーツ」
不昧堂出版 1984年
- 12) John Hargreaves「スポーツ・権力・文化」 不昧堂出版 1993年
- 13) Peter McIntosh「現代社会とスポーツ」 大修館書店 1991年
- 14) 中村敏雄「日本的スポーツ環境批判」 大修館書店 1995年
- 15) 大野 晃「現代スポーツ批判」 大修館書店 1996年
- 16) 谷口源太郎「スポーツの真実——迷走するスポーツ界の影と光」 三一書房 1996年
- 17) 本間康平 他編「新社会学辞典」 有斐閣 1993年
- 18) 法務省法務総合研究所 編「犯罪白書」平成9年度版